

一 『雨夜談抄』の位置づけ ―注釈姿勢は何故変化したのか―

大阪大学大学院(院) 川渕紗佳

『源氏物語』の古注釈史において、一条兼良『花鳥余情』以降、詳細な出典考証よりも、文意・文脈の解釈を重視したことは、既に明らかとなっている。しかし、この現象が何故生じたのか、注記内容から検討したものは、未だ見受けられない。そのため、本発表では、古注釈書の注記内容から、どのような注釈姿勢で注記を施したか検討する。

四辻善成『河海抄』の料簡では、『源氏物語』には准拠が存在し、複数の歴史的対象や人物、先行する物語作品を取り合わせて、物語が構築されていると説かれている。糧となる対象が存在し、その上で、物語作品が創作されたと考えられていたのである。『源氏物語』の外部世界に主眼がおかれていた。

一方、文意・文脈を明らかにすることに重点を置いた注釈書では、物語の捉え方が変化している。宗祇『雨夜談抄』では、紫式部は『源氏物語』を自分が創作したように見せず、昔の出来事を聞き及び、著したように書いたのだと定義する。『源氏物語』の出来事は、物語内部の世界では、事実として認識され、実際の出来事を書き記した体裁を取るとする。『源氏物語』の内部世界に目が向けられる、この創作態度は、『雨夜談抄』で初めて確認できる。このように、注釈姿勢に変化が見られるようになったのは、物語の創作態度の捉え方が変化したためである。そして、事実を書き記したという前提から、語り手に着目するようになったと考えられる。

本発表の目的は、『雨夜談抄』の古注釈史における位置づけを再検討することである。『雨夜談抄』はこれまで、「草子地」という用語が確認できる最古の注釈書という一面のみが、重視されてきた。しかし、それだけでなく、中世源氏学において、『源氏物語』の捉え方が端的に記される重要な注釈書であることを示したい。現代でも広く認知されている物語観を、宗祇が既に提唱していたことは、『源氏物語』の享受史を考える上で見過ごすことのできない事象である。

二 深川本狭衣物語(巻一)起筆部本文の再検討

大阪大学(院) 小林 理正

狭衣物語の開巻は、それ以前の作品とは明らかにレベルが異なる。「少年の春(深川本)」とはじまる起筆部は「異同の山」と比較すれば、本文が激しく揺れ動かない。けれども、ある一文の有無については、さまざまなレベルで検討が重ねられてきた。――「光源氏、『身もなげつべし』との給けんもかくや」がそれである。当該本文は、深川本系本文の異文であるが、他系本文にみえる場合もある。他系伝本に認められる事例は、伝写過程で加えられたものであるから、今回問題としない。

本発表で取りあげるのは、「光源氏、『身もなげつべし』との給けんもかくや」など、ひとりみたまふもあかねば」の一文である。とくに深川本本文と流布本本文で一致する「ひとりみたまふもあかねば」について注目する。同本文を、梗概本のごとき本文を備える伝勸修寺教秀筆本に拠って確認すると、「ひとり立給ひて」とある。この「ひとり立給ひて」は「ひとりごち給ひて」の誤写と考えられる。肝腎なのは、「ひとりみたまふもあかねば」に対応する本文が「ひとりごち給ひて」であることだ。鎌倉期本文である深川本の本文を読み解くために、室町期本文の解釈を直ちに応用することは控えねばならないことはいままでもない。しかし考えてみると、「光源氏、『身もなげつべし』との給けんもかくや」など、ひとりみたまふもあかねば」とある深川本本文の解釈、つまり、引用句を「ひとりみたまふもあかねば」とする理解は、よく分からない。けれども、狭衣が引用句を「ひとりごちたまふもあかねば」なかつたとすれば、深川本本文の解釈上の不審は解消されることになる。

本稿は、「光源氏、『身もなげつべし』との給けんもかくや」など、ひとりみたまふもあかねば」の一文にかかる諸問題を、その構文に注意しつつ、表現類型の分析をつうじてみつめなおすものがある。